

高温に関する緊急技術対策

平成 22 年 8 月 31 日
福井県農業総合指導推進会議

梅雨明けから、平年より高温で少雨という状態が続いています。この状態は、今後さらに 1 週間程度続く見込みなので、熱中症対策として、高温下での長時間作業を避け、水分補給と休憩を十分にとるなど健康管理に十分注意しながら、以下の点に留意して農作物の管理を実施してください。

「水 稲」

1 間断通水の励行

根に水分と空気の両方を供給し、収穫直前まで稲体の活力を維持するため、収穫直前まで間断通水を実施する。

2 刈り遅れに注意

高温年は、刈取時期の判断を誤り、刈り遅れによる品質低下を起こしやすくなる。県や JA など、指導機関からの情報に十分留意するとともに、穂先の粒が胴割れしていないか確認したり、籾水分を把握（収穫時期の目安となる籾水分は 25%）し、適期収穫に努める。

3 過乾燥防止

急激な乾燥は胴割れ発生を助長する。1 時間あたりの水分減少（毎時乾減率）は 0.8% 以下とする。玄米の仕上げ水分は 15.0% を目標とし、過乾燥とならないようにする。

籾摺り作業は、籾の温度が常温に戻り、水分ムラがなくなってから行う。

「大 豆」

1 うね間灌水

- (1) 根粒の窒素固定活性および光合成、土壌養分吸収の維持のため、無降雨期間が 7 日以上続き、溝面が白くなり始めたら、うね間灌水を実施する。
- (2) 短時間で水を圃場に流し込み、圃場全体に水が行き渡ったら、湿害回避のために速やかに排水する。排水の悪い圃場では、湿害を招き逆効果となるため実施しない。
- (3) できれば、地温の低い夕方または早朝に行う。排水溝や暗渠排水の栓を閉じる。

2 病虫害防除

- (1) カメムシの防除時期は 9 月 10 日頃と考えられるので、適期に防除する。
- (2) ハスモンヨトウについては、圃場を観察し、白変葉が見られたら防除する。幼虫の大きさが 1cm までなら、局所的な薬剤散布で効果がある。

「そ ば」

1 ハスモンヨトウの防除徹底

圃場を観察し、白変葉が見られたら、防除する。幼虫の大きさが 1cm までなら、局所的な薬剤散布で効果がある。

「園芸（共通）」

1 ハウスの管理

(1) 換気の徹底

ハウスサイドや妻窓、天窓などを常時開放する。場合によっては、肩部のビニールを開放するなど開放面積を大きくして換気する。

(2) 遮光の実施

パイプハウスの遮光は天井尾根部（ハウスの屋根）に寒冷紗など遮光資材をベタ掛けする。ハウス天井部のベタ掛けができない場合は、塗布剤を使用する。

「野菜」

1 施設野菜（トマト、ミディトマトなど）

(1) ホルモン処理は夕方温度が下がってから行う。トマトトーンの濃度は120倍程度とする。

(2) ハダニ類やサビダニ類の虫害防除は特に留意する。日中高温時の薬剤散布はしない。

(3) 灌水は土壌の乾燥状況を見ながら、1～2日おき程度に地温が下がっている日の出前に行う。たくさんやりすぎて根腐れを起こさないよう注意する。

(4) 薄めの液肥等を少量ずつ多回数施用し、樹勢の維持に努める。

2 ニンジン、ダイコン

(1) ダイコンは高温時に軟腐病が多発するため、播種時期を遅らせ、播種の深さは1.0cmの深めとする。

(2) 灌水ムラによる発芽ムラがないように夕方～夜にかけて、十分に灌水する。

(3) ニンジンではキアゲハやヨトウムシ類、ダイコンではハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）の発生に留意する。

3 ネギ

(1) うね間灌水は軟腐病が多発するため、行わない。

(2) 灌水チューブ等で灌水できる小規模な圃場は、葉が萎れている場合、軽く灌水する。

(3) 生育が進まず土寄せできない場合はうね間の除草は中耕で行う。

4 ナス、サトイモ等

(1) 敷わらを厚くして地表面からの水分蒸散を抑える。

(2) うね間灌水は、根腐れ防止のため長時間水をためないように注意する。

5 イチゴ

(1) 生育適温は18～23℃と冷涼な気候を好むため、温度管理に注意する。

(2) 黒ポリポットでの育苗は、ヤケ防止のため、ランナーがポットに触れないように配置する。

(3) ランナーを切り離す時の乾燥や高温に注意し、萎れを防ぐ。

(4) 高温で花芽分化が遅れる恐れがあるため、定植前には花芽を確認する。

6 キャベツ、ブロッコリー等

(1) 定植は夕方涼しくなってから行い、うね間灌水を行う前に萎れさせないため、株元灌水で活着の促進を図る。

「果樹」

1 灌水の実施

乾燥している圃場は、1回当たり15～20mm程度の灌水を必ず実施する。その後、1週間から10日降雨がない場合は、再度灌水を実施する。なお、収穫期の樹種・品種では、収穫7～10日前からの灌水は糖度低下につながるため、計画的かつ早め実施する。

2 収穫

果実の鮮度を良くするために収穫は早朝の涼しい時間帯に行う。 収穫果は直射日光を避けてなるべく涼しいところに保管する。

3 防除

高温条件下ではハダニ類が発生しやすいので適切な防除を心掛ける。また、ナシではカメムシの園内侵入に注意する。

「花 き」

1 土壌水分保持対策

- (1) 土壌水分の蒸発抑制と地温上昇防止のため、作物の生育程度に応じて、敷藁、敷草等を行い、乾燥を軽減する。
- (2) 灌水は、地温が十分低下する夜間か早朝に開始し、できるだけ短時間のうちに終わるようにする。また、熱帯夜のときは避ける。
- (3) うね間灌水をする場合は、夜間か早朝に流し水にして短時間で行う。

2 高温障害防止対策

- (1) 高温期に施設内での播種や定植する花き類は、地温・気温の低下を図るため、定植日の5日程度前から定植後5日程度は黒寒冷紗等の遮光資材を施設の屋根にかけておく。また、予め十分灌水して、定植時の土壌水分を保つとともに、定植後に灌水を必ず行う。
- (2) ストック等の播種後の管理は雨よけハウス等で行い、育苗箱はベンチ等の上に置き、育苗箱下に空間を設けることで、風通しを良くする。

3 病虫害防除

- (1) 高温と乾燥によりハダニ類、アザミウマ類等の被害が多くなるので防除を徹底する。
- (2) 高温期の農薬散布は、早朝か夕方の涼しくなってから実施する。植物体がしおれた状態では、薬害がしやすいので注意する。

「畜 産」

- (1) 大型ファンなどにより送風し、体力の回復を図る。 また、牛の体温は夜間に上昇するので、夜間送風も必ず実施する。風通しを良くするため、畜舎通路には物を置かないようにする。
- (2) 寒冷紗などを設置し、西日が差し込まないようにするなど、畜舎の温度を下げる工夫する。
- (3) 畜舎の屋根に散水することで、畜舎内温度を下げる工夫する。
- (4) 新鮮な水が充分飲めるようにする。
- (5) 乳用牛では高品質で栄養価の高い粗飼料の給与と濃厚飼料の多回給餌を行い、ミネラル・ビタミンを補給する。
- (6) 肉用牛では暑熱によりビタミンAが消耗する場合があるので、異常が見られたら早めに補給することも考慮する。
- (7) 分娩や哺乳中の母豚には首筋に水を滴下するドロップクーリングが効果的である。